

福祉のひろば

9

2012

月刊化二五〇号記念

編集

総合社会福祉研究所

社会福祉に関わり、働く
若もの一七人が企画・取材・編集！

特集
いきいき若者
インタビュー！

座談会
若者が
めざす明日

TOPICS
150号の
編集過程を
追う

特集

いきいき若者インタビュー！

福祉に関わり、働く若者一七人でつくりました!!

七月の最後の編集会議直前、ある編集メンバーに「ほんまに、最初の会議のときは、これからどうなるんかと思った」と言われました。緊張でまったく余裕のない私と、これから何をするのかよくわかっていない編集メンバーで二月に行った第一回編集会議は、確かに不安しか感じないような会議でした。それでも「やるからには頑張りたい」と感想を述べてくれたメンバーは、本当に素敵です（笑）。

社会福祉・社会保障分野の状況がどんどん厳しくなる中で、やりたい実践がなかなかできないジレンマを抱えるメンバーが知りたいこと、「福祉のひろば」を通して発信したいことは、「どうしたら、いきいき働けるのか」ということでした。

取材先の「いきいき若者」たちはみんな、いろんな悩みや葛藤を抱えながらも、まわりの人に支えられていること、そして自分が必要とされていることを実感しながら、いきいきと働いていました。私たちは、働く環境が「いきいき」に大きな影響を与えていることを知りました。では、どうしたらそんな「いきいき職場」にできるのか――。編集メンバーが取材を通して考えた「いきいき職場」の条件を六か条にまとめました。

この九月号を手にとった読者のみなさんと一緒に元気になるものになりたいと願い、企画を進めてきました。ぜひ、いきいき若者から元気をもらい、そして明日から実践してみてください！

☆テーマ

手に取ってくださった人（特に社会福祉に関わる若者）が、読んで、見て、元気になるメッセージを発信する。

☆大切にすること

- ① 若者が夢を語り合える、明るい誌面を楽しくつくる！
- ② 編集メンバー全員が役割をもって関われるようにする！
- ③ 編集メンバー一人ひとりが、目的と目標をもち、何かを得られる企画にする！
- ④ 編集作業の場が、さまざまな分野で活躍する若者同士の交流の場、つながりの場となるようにする！

いきいき職場6か条

1. 失敗が許される職場

チャレンジを引き出すためには、失敗を許容する文化が必要ですよね。

「絶対にホームレスにならない日本だったら、いろんなことに挑戦する」という指摘に納得！
⇒座談会 (p.39)

2. 必要とされ、誇りを持てる職場

若者はみんな自分の仕事に誇りを持ちたいと願っている。

一人ひとりが誇りを持って、必要とされていることを実感できる環境に！
⇒いのこの里「鮭と人権」(p.16)、あさがお (p.34)

3. 感謝を実感できる職場

「感謝すること」「褒めあうこと」。大切なのはポジティブな言葉で始まるコミュニケーション！ ダメなところの指摘も大事だけど、あくまで「怒る < 褒める」。

⇒座談会「ありがとうカード」「ほめほむメール」(p.40)

4. 叱られる理由がわかる職場

ひと昔前までは「叱られた理由は自分で考えろ！」だったのかもしれないけど、価値観や経験が多様化した今、理由を伝えないのは勘違いの素！

⇒あさがお (p.34)

5. 原点を思い出せる職場

日々の仕事に追われて忘れてしまいがちな理念や原点。いつでも意識できる仕組みが必要かも！

⇒いのこの里 (p.15)

あさがおの佐藤さんの原点は？

⇒あさがお (p.32)

6. 本音と言える職場

「本音で話そう」と言われても言いにくいムードの職場になっていませんか？ 本音と言える言えないというのは、個人の問題じゃなくて職場の問題。素直に意見が言え、それが受け入れられる環境が大事！

⇒いのこの里 (p.15)、なかよし保育園 (p.28)

いのこのいきいき

—信頼関係がつくる食事と誇り—

特別養護老人ホーム いのこの里 (大阪府吹田市)

料理長
岩井

だい
大さん
(37歳)



いのこの里では「普通の生活」という理念のもとに、一人ひとりに配慮した、家庭と同じような食事をめざしています。おいしく楽しく食べてほしいと、ミキサー食にも力を入れ、「呼吸ケアと嚥下ケア学会（こえんげ）で2回も最優秀嚥下食を受賞しました。」



調理師
山下 友貴さん
(33歳)

僕がいのこに来たとき、ミキサー食は試行錯誤中ながらも土台はできていて、僕はそこに乗っけてもらった感じです。今年、賞をもらった「鍋に入れても溶けないミキサー食（以下、お鍋）」は、賞のために創作した

Q. 最優秀嚥下食を受賞してどうですか？
「満足したらアカンと思います」

今から育っていく子どもとお年寄りでは、食事のつくり方も気持ちの持ち方もまったく違います。ここに来てからは、仕事の内容も考え方もガラッと変わりました。

Q. いのこの里で働くこう思ったきっかけは？
「人生最後の食事をつくるのが俺らの仕事や！」
保育園の調理師を経て、ここに来ました。採用面接のとき、岩井料理長に「自分たちは高齢者施設で働いているから、看取ることも多くなる。利用者さんの最後の食事をつくることになるかもしれないのが俺らの仕事や」と言われ、その言葉がとても胸を衝きました。

◎山下友貴さんのお話

今年、最優秀嚥下食を受賞した「お鍋」。具をミキサーにかけ、それをまた固めている。見た目も味も鍋そのもの。



しいけど、満足したらアカン。

個別食対応もまだまだ一対一の対応までできていないし、利用者さんの嫌いなものには対応できているけど、好きなものを提供できているのかということも考えます。むずかしいところもあります。が、これからもっとそのへんを詰めていきたいと思っています。

Q. チャレンジ精神の源は？

「なんでも言える上司との関係」

料理長がなんでも「やってみよう！」という姿勢の人なので、料

理長についてはいつてるところはあります。新しいことを始めたいと言うと、やっぱり忙しいから「うーん……」ってなりますよね。

でも何か提案が出たときに、「やってみよう！」という姿勢を料理長も僕も持っています。そこが本当に大事だと思います。確かに最初は「できるんかな？」って思うけど、できちゃうものなんですよね。

大切なのは、新しいアイデアや言いたいことを職場内で言えることだと思っています。ジョブローテーション(*)でまったく違う部署の仕事を経験する研修もあり、他部署との風通しもとても良いです。

「料理長の向いにあるのは、

いのこの里の「理念」

「俺らのする仕事は、八〇人の食事をつくるという集団調理じゃ

ない。『家庭の延長としての生活の場』という理念を掲げている高齢者施設の調理師なんだから、ただ大鍋でつくるというのではだめだよ」ということを最初に料理長にガツンと言われました。私たちが考えること、することのすべては利用者さんに返るという、いのこの里の理念をしつかり教えてもらいました。



他の部署の職員さんとも仲良し！ 山下さん(左)は、いのこの里つり部キャプテンです！

「期待してくれるから、

がんばろうと思う」

上司や管理職の方たちが、僕たちの話に耳を傾けて、受け入れてくれるので、本当に感謝しています。やりたいと言ったことをやらせてくれる環境です。「理念は大事」と言うだけではなく、「それを具体化するとはどういうことか」、「どうしたら理念を實踐できるのか」というところまで話ができます。

「食」ってほかの施設でも予算削減の対象になりやすいと思いますが、いのこは大事にしてみたいです。予算を削ったりせずに私たちに期待してくれているからモチベーションも上がるし、よりいっそう頑張ろうと思います。

だから、仕事も楽しいです。ここに来てからは辞めたいと思ったことはありません。たしかにサラ

リーマンの友だちと比べて給料は安いなあと思うけど、お金だけじゃないと思うようになりました。天職とまでは言えないけど、「高齢者施設の調理師だ」と自信を持って言えます！

◎山下さんを支える先輩

料理長の岩井大さんのお話

●鮭と人権

お皿に鮭を乗つけて、「俺ら調理師はどれだけ人権に配慮した食事なのか。それが俺らの専門性！」と飲み屋でよく話します。鮭を刻みにするのかミキサー食にするのか、形はどうするのか、お皿はどうするのか……。どれだけ一人ひとりの人権に配慮した結果を焼鮭に出せるのかということなんです。

いのこの里に来るまでは、飲食店の調理師として、不特定多数の

人に料理を提供してきました。でもここでは、毎日特定の人に、最後の食事になるかもしれないものをつくります。だから、最後の食事は絶対おいしいと思ってほしいし、自分も最後に納得できない食事は出したいありません。

こういう話を、仕事中でも飲み屋でもいつもしています。とにかく俺が何を考えているのかを常にか話し、後輩の話を聞き、しっかりと意思疎通を図ることが大切だと



聞いていて楽しくなる「いきいき話」に取材メンバーも「満腹」です！

思います。

●家族と一緒に鍋をつついてほしい
毎年この忘年会で、利用者さんのご家族も呼んで鍋をします。そのときに「なんとかしてミキサー食の方も一緒に鍋をつついてもらいたい!」と思いました。ゼラチンとかいろいろ使って試行錯誤する中で、やっと賞に出したお鍋が完成しました。賞をもらったことより、ご家族から「いのこの里の忘年会やったら、おばあちゃんと一緒にお鍋が食べられる!」と言ってもらえる充実感ほたまりません。

これをきっかけに、もっとほかの施設にも真似をしてほしいです。真似してくれたら、一緒にお鍋を食べられる人が増えるし、楽しくご飯が食べられる利用者さんが増えるでしょ? 利用者さんが

一人でも多く喜んでくれることが、一番おもしろいし、この仕事の魅力だと思っています。

●長く続く要因は仕事への自信
いのこに来る前は、高い材料で手の込んだものをつくって、「これこそ調理師や!」と思っていたけれど、ここに来てから考え方が変わりました。ミキサー食でいろいろ挑戦したり、「最後まで人間らしく」を食の面から追求するという点で、堂々と胸を張って「特養の調理師や!」と言える。自分の仕事に自信を持っています。

いのこの里で一年続いた人はその後、だいたいみんな長く働いています。理由は「自信」やと思います。俺らはこれだけ挑戦して試行錯誤して、利用者さんがこれだけ喜んでくれているという自信があるから続くと思います。

◎施設長の山本智光さん(39歳)

にもお話を伺いました。

*ジヨブローテーションで

風通しの良い職場に!



山本施設長

三年目を迎える職員が、他部署で二日間就労体験する研修システムです。一定の仕事覚えて職員に、他部署に行って施設全体の運営を学んでほしい、また部署間の連携をスムーズにしてほしいという思いで始めました。他部署に入ってみて初めて、その部署の一日の流れや忙しい時間帯がわかります。お互いの業務を知ることによって連携がスムーズになるんです。私もこの研修の一期生で厨房に入り、岩井さんのもとで朝五時から、ゆで卵を九〇個、むきましたね(笑)。

取材を通して

うえがきしあき
*上垣利昭（高鷲保育園 栄養士）

仕事に誇りを持つ先輩がいて、それを受け継ぐ後輩がいる。いきいき働く若者は、自信に満ちた先輩に育てられていました。



今回、若者として参加した私ですが、一年ずつ先輩の道にも進んでいます。福祉職場で働くことに胸を張り、その自信を後輩に伝えられる先輩になろうという意識が芽生えました。

こやま
*小山みちる（せんごくの里 栄養士）



まず根本的な考え方、環境が違っていました。私の

職場も調理員同士、何でも言えて、何でもやってみようという働きやすい環境ですが、これだけの大きな組織で、施設全体で同じ方向に向心を持って働けるというのはすごいなと感じました。何より本当に仲が良いのが伝わってきて、取材中みなさんの笑顔が絶えなかったです。

そして、「最後の食事をつくる。亡くなったときに、本当にその人が納得いく食事だったのか。そのためにも常に自分自身が納得できる食事をつくりたい」という話が印象的でした。私の職場は老人ホームではありませんが、常日頃からそのくらいの意識を持って、一食一食、丁寧に

くまもとよしひこ
*熊本容仁（高鷲学園 調理員）

取材が始まる前から先輩・後輩の関係が良さそうな雰囲気伝わってきました。お二人ともいきいきした顔で「今の仕事に自信を持っている」と言われたことが、とても強く印象に残りました。

「家庭の延長の生活の場」という理念に基づいた仕事をお互いが共有し、理解しているため、しんどいことがあっても、いきいき働けているのかなと思うと同時に、常に利用者の方に目を向けた仕事を実践していることで、調理師としての自信につながっていると思いました。

「鮭と人権」の話では、調理師としての専門性に気づくことができました。これからの仕事でも今まで以上に利用者さんの方を意識して実践していこうと思いました。



クラウン

新たな世界にチャレンジ!

— “笑われる” ことを誇りに —

土曜日の天使達

社会福祉法人かがやき神戸
就労継続支援事業 B 型「ぐりいと」



「ぐりいと」では、障害のある人たちがクラウン（道化師）を仕事にして活動しています。職員は、施設長の山本喜代己さんと、立ち上げから関わっておられる武村厚志さん（33歳）、そして昨年5月から働く平山慎子さん（36歳）です。武村さんと平山さんにお話を伺いました。

◎武村厚志さんのお話

* 「ぐりいと」開設！

障害者自立支援法が制定された際、障害者の問題をもっと世の中に知ってほしいという啓発・広報活動として、社会福祉法人かがやき神戸の利用者さんやご家族、職員の中からやりたい人を募って、有志でクラウン活動を始めました。

二〇〇六年六月、二〇人くらいで神戸大丸で公演をしたのが始まりです。それが口コミで広がり、だんだん依頼が増え、二年後の二〇〇八年、クラウンを仕事にしてみてもどうかということで、作業所「ぐりいと」を開設することになりました。

＊ゼロからのスタート

私は「ぐりいと」の立ち上げが決まったときに、異動でここに来ました。

最初は山本施設長と二人で、ゼロからのスタートです。利用者（以下、仲間）の工賃をクラウンの収入だけでは支払っていけないので、まずは他にどんな仕事をするか考えるところから始めました。

仲間のご家族の提案で、風船に小麦粉を入れた人形（もーみーちゃん）をつくることにしました。観光施設の神戸花鳥園（こうべからやうえん）に毎週のよう仲間と通って売りましたが、売り上げは一日一個のときもありました。あとは地域の自治会館の掃除です。

＊仲間に工賃を払っていききたい

仕事を軌道に乗せて、仲間に工賃を払っていきけるのが一番の不安でした。仕事をしている限り、工賃を払っていきいたいし、事業の収支がプラスになるようにと、一年目はそれだけを考えていました。予想よりクラウンの公演が多く、どうにかプラスにすることができました。現在は収入の半分くらいはクラウンの公演料です。

＊メンバーの成長が見られたことが良かった

「ぐりいと」を始めた当初の仲間は、遅刻や休みが多く、みんながそろふことは少なかったです。でもクラウンは外に出ていく仕事で、出演料をもらうということは

プロのクラウンと同じです。時間を守る、挨拶をするなどの社会的なルールについて、仲間と何回も話し合いをしてきました。今はほとんど全員が無遅刻・無欠勤です。

全員が出演できるわけではないので、仲間同士の競争というか、「舞台に立ちたい」「頑張らないと舞台に立てない」というのが練習のモチベーションになっていると思います。やっぱりそれぞれ「注目されたい」という気持ちがあると思うし、注目されること、お客



武村さん



さんが笑ってくれることが仲間にとって本当に気持ち良くて、うれしいのだと思います。終わったらすぐに「次はいつ？」と聞いてきます。

最初は人見知りでも人前に出られるようなタイプではなかった仲間が、今は堂々と楽しそうに演技しています。そういう仲間の成長を目の当たりにできたことは良かったです。

仲間がクラウンの仕事に誇りを持っていて、それを見ているだけで今はもう安心です。将来的にはクラウンの収入だけで工賃を出せればと思っています。

◎平山慎子さんのお話

Q. クラウンも仕事にする「ぐりい」との魅力は？

「個性を活かせるのが一番の魅力」

一般的な内職のような仕事だと、手先の器用さや体力があるかどうかの仕事に影響しますが、クラウンは一人ひとりの個性が一番大切で、それを活かせるのが一番の魅力だと思います。その意味で、職業選択の幅も広がっているのではないかと思います。

障害がハンディになりにくく、健常者と対等に思えることが多いのも特徴だと思います。一般の仕事だと、健常者のレベルが基準としてあって、どこまでそこに近づけるかを求められることがあるように感じますが、クラウンは違い

ます。プロのクラウンと対等に渡り合えるというか、仲間の公演のほうがお客さんに笑ってもらえたりすると、「うふっ」とうれしくなりますね。クラウンの仕事は、そこがおもしろいと思います。

「笑ってもらえることがモチベーションに」

私がステージに立つと、たぶんめっちゃ緊張して頭の中が真っ白になって帰ってくると思います。が、仲間のみんなは舞台から戻ってきたら、「あの一番前のおっちゃん、めっちゃ笑ってたな」とか、すぐお客さんを見えています。本当にすごいなと思います。笑ってくれることが励みになっているんだと思います。

だから、クラウンの練習時間に



平山さん

なると仲間の中でスイッチが入る感じですね。この時間は頑張らないとアカン、自分らでルールを守って、ちゃんと練習しないとアカン、みたいなけじめがあるんです。ちゃんと練習して、次も舞台に立ちたいという気持ちがあるからだと思いますが、そこはすごいなあと感じします。

Q. 逆にたいへんなことは？

「千差万別のステップアップ」

一般的な作業では、「これができたら次はこれ」とだいたい段階

的にステップが決まっています
が、クラウンの仕事は決まったス

テップがありません。この人にはこのやり方が良かったけれど、あの人にはそれではうまくいかなかった全然違うやり方が合っていたり、ステップアップの過程や方法が千差万別なんです。

そんな中でその人の方向性がなかなか見つけれなかったり、その人の個性を引き出しきれていないと思うときは悩みます。楽しそうじゃない仲間を見るのは、一番つらいです。

Q. いきいき働ける秘訣は？

「職員が全員、B型だから（笑）」

私は昨年の五月にここに異動になったのですが、公演に向けてみんなと一緒に練習して、舞台上に立つて、失敗もあるけどお客さんが笑ってくれて無事公演が終わり

ホッと一息ついたときに、達成感というか、「ぐりいと」に來られて良かったなと思います。

たまたま職員三人とも血液型がB型なので（笑）、職員同士も合っているのかなと冗談を言っています。こうしたささいと全部指示されたり、ダメ出しされたりせず、思うようにやれば良いと言ってくれるので、好きにやらせてもらっています（笑）。

クラウンは「仕事」なので、笑ってもらえる公演をつくっていくことはもちろん大切ですが、仲間一人ひとりが持っている能力を最大限に伸ばして、この仕事に誇りを持つてくれたらと思います。「自分たちの仕事はこれだ！」と思ってくれるようなものにしていきます。

取材を通して

***吉田真弓**（豊里学園 支援員）
よしだまゆみ

すざく 朱雀中学校での公演を観させていたいただきましたが、利用者さんがクラウンを仕事として楽しんでおられる姿がとても印象的でした。クラウンの出



演料だけで利用者さんの工賃を払えるようにしたいという職員の方々の思いも強く伝わってきました。クラウンを職業として取り組むということが、他にほとんど例がないことなので、いろいろと試行錯誤しておられることがよくわかりました。

利用者さん一人ひとりの持っている能力を引き出し、誇りを持つてほしいと語っておられましたが、本当に一人ひとりの個性がとても活きていて、うまくバランスがとれているなと感じました。

私も障害児の施設で働いていますが、療育活動の一環で和太鼓の担当をし、一人ひとりの意識を高めることのむずかしさや人前で演奏することのおもしろさ、たいへんさなどをとても感じています。そういう面でもとても

魅力的な作業所だと思いました。

***馬場 優**（東桃合幼児の園 保育士）
ばば ゆう

「ぐりい」とでクラウンをしている仲間のみなさんは、みんないきいきしていて笑顔に満ちあふれていました。クラウンを仕事にし、公演でお金をもらうためには、努力も必要だと思うし、仲間たちの意識をどのようにして高めているのかに興味がありました。公演を重ねる中で仲間集団ができ、仲間同士で練習をし、叱咤激励して高め合っているということでした。その中でも仲間だけに任せっきりのではなく、仲間それぞれにあった練習方法を考えて実践することも大切にされていました。

平山さんは、一つひとつの公演が終わるたびに仲間の笑顔を見ると「やってて良かった」と達成感を感じる、と話されていて、保育園の運動会などの大きな行事で子どもと一つのことをつくりあげた達成感と同じだと思いました。それがあるから

頑張れる、この仕事をやっていてよかったと思えるのだと思います。私と職種は違うけれど、進む方向は同じなのだと感じました。



被災地で働く若者にも話を聞きたいッ！

……というワケで、1泊2日で福島と宮城へ取材に行きました。

今回は掲載できませんでしたが、いろいろな方にお話を伺いました。後日、報告集などでの報告を検討しています。

福島取材班

7/2 (月) 8:30
夜行バスで福島駅着。
レンタカーで南相馬へ！



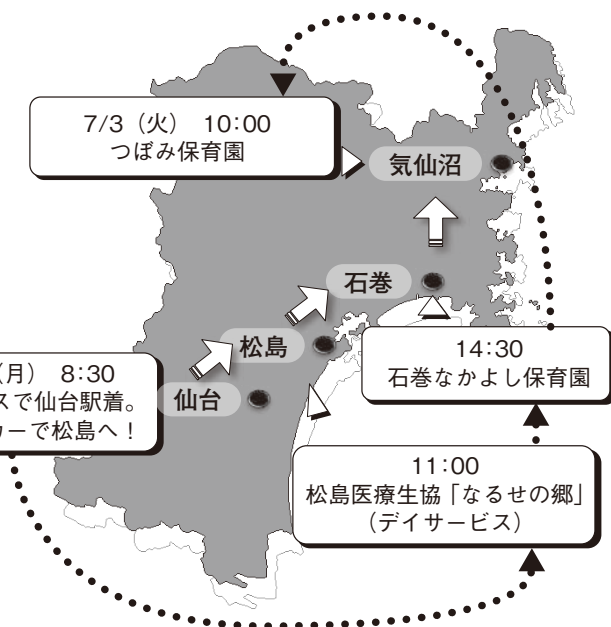
7/3 (火) 10:00
NPO法人「ひまわりの家」
(精神障害者支援施設)

11:00 NPO法人「あさがお」
↓
14:30 澤田さん宅 (南相馬市 農業委員)
↓
17:00 デイさぼーと (障害者「びーなっつ」支援施設)
↓
夜 NPO法人「あさがお」
のグループホームにて宿泊

宮城取材班

7/3 (火) 10:00
つばみ保育園

7/2 (月) 8:30
夜行バスで仙台駅着。
レンタカーで松島へ！



14:30
石巻なかよし保育園

11:00
松島医療生協「なるせの郷」
(デイサービス)

失われてあらためて感じた、 人とのつながり

—こころの復興に向かって—

なかよし保育園 (宮城県石巻市)

保育士 佐藤 恵さん (28歳)

園長 大橋 巳津子さん



佐藤さん

震災を
忘れないで!

がまんを
ためないのが
大事

大橋園長



なかよし保育園

なかよし保育園は、震災で床上浸水の被害を受けました。保護者がお迎えに来られなかった五人の園児と職員が保育所の二階で一晩を過ごしましたが、全員無事でした。

お母さんたちの要望を受け、四月一日に保育を再開。地域への支援物資の分配拠点としての役割も担ってききました。そんななかよし保育園で働く佐藤恵さんと、園長の大橋巳津子さんにお話を伺いました。

◎佐藤恵さんのお話

Q. 震災のときの状況を聞かせてください

「園に向かう途中で津波に遭って……」

三月一日の午後から有給休暇を取っていた私は、外出先で地震に遭いました。すぐに車で保育園に向かいましたが、途中で前から横からもがれきが流れてきて、パニック状態になりました。そばにあったアパートの二階にいた人が「早くこっちへ」と叫んでくれて、間一髪で避難できました。

でも、「これが津波だ」という認識はありませんでした。防災無線も放送されていたそうですが、私の耳には入ってきません。アパートで隣にいたおばさんが、「こんな津波、初めてだ」とつぶやくのを聞いて初めて、「ああ、津波なんだ」と認識した感じです。

翌日の朝、まだひざ上まで水がある中、泣きながら歩いて家まで帰りました。

「保育園と連絡がとれたのは一週間後でした」

そのまま保育園とは連絡がとれず、同僚の先生たちが私の無事を知ったのは地震から一週間後でし

た。

電気も水もガスも止まり、初めてお風呂に入れたのは地震から一二日後です。あたりまえに家族がいて、あたりまえにライフラインを使えることがどれだけ幸せか、震災をきっかけに気づきました。

「大人も心のケアが大事」

震災後は子どもたちの心のケアも大事でしたが、お母さんたちの心のケアも必要でした。大人の気持ちの変化はすぐに子どもに伝わります。被災したときの状況や不安など、とにかくお母さんたちの話を聞き、受け入れることを心がけました。それはこれからも重要なことだと思っています。やっぱり話すことは大事です。

心のケアの研修会や学習会にも参加するようにしています。現場で働いている以上、学べる機会があれば行って、できる範囲で自分のものにし、実践に移すようにしています。

「子どもたちが、津波ごっこ」などの遊びの中に



気持ちを表現するのと一緒で、大人は話すことで自分たちの気持ちをコントロールする」という話を聞き、自分のしていたことは正しかったんだと思いました。こうして学ぶことで自分自身も助けられるし、それを仕事にも生かせていると思います。

Q. 自身も被災しているのに、保育士として人を支援するのは大変じゃないですか？

「みんなも大変だけど私も大変、と話すんです」

最初は、私も津波の夢をみたり、思い出してしんどくなったりすることがありました。でも、職員や友だちと話すとき必ず震災の話になります。そうやって話すことで、少しずつ自分の気持ちを整理することができました。

だから、お母さんたちとも、話を聞くと同時に一緒に私の状況や気持ちを話します。自分の気持ちを言えずにいる人や、「私なんか、まだましな方だよ」という話し方をする人もいるけど、「みんなも大変だけど、私も大変！」という話し方をするのが大事だと思います。嫌なことをためないで、会う人会う人に話す。いろんな思いをまわりの人と共有することが大切です。

「支えてくれる人がいます」

園が四月一日から再開することができたのも、お母さんたちのここに通わせたいという思いと、職員の「みんなで頑張ろう」という協力があつたからです。ガスがきていない状態でブルーシートを敷きながら保育を始め、みんなとにかくやれることをやりながらここまで走ってきたという感じです。誰かが頑張っているのと、「自分も頑張らないと」と刺激を受けます。

しんどいなと思ってても、話を聞いて、受け止めてくれる仲間がいます。一人じゃないし、私のまわりには支えてくれる、心配してくれる人がいるということを感じました。

Q. 県外への避難は考えましたか？

「ここで頑張るしかない」

そっか、そういう手もあるんですね（笑）。考えたことなかったです。自分が生まれ育った場所だし、ここにいる



ものだと思っていました。

震災後、特に家族に対する意識は変わりました。協力しないと生きていけない状況が続き、家族ってこんなに大事なんだとあらためて実感しました。

地域でも、店が再開したり、道路が新しくなったり、復興の様子が目に見えるのもうれしいです。それを見ると「私も頑張ろう」と思います。ここで頑張るしかないと思っています。

Q. 世間に伝えたいことはありますか？
「まだまだ苦しんでいる人、頑張っている人がいることを忘れないでほしい」

一年半たって、テレビでも震災の話はあまりしなくなりましたよね。確かに全体的には復興しているかもしれないし、前向きに頑張っている人もたくさんいます。でも、同じ保育園でも片づいていないと



ころもあり、ハード面でも気持ちの面でもまだまだ苦しんでいる人はたくさんいます。そういう、今を頑張っている人がまだたくさんいるということを、忘れないでほしいと思っています。

◎園長の大橋巴津子さんにもお話を伺いました。

●「大変だったよね」と話し合うことが大事
心に思ったことは、外に表現して初めて周囲の人に伝わります。ですから、保育園を再開したときから、「震災のときはどうだった？」と何度も何度もお母さんや職員と話をして、一緒に泣きました。クラス懇談会のときも、普段は保育やクラスの目標を出しますが、園の再開後は「あのときどうだった？」とお母さん同士で話をしました。家に帰れなかったり、奇跡的に助かったり、本当にいろんな体験をしたお母さんたちがいて、みんなで泣きながら「ここからスタートだね」って話しました。泣けることは大事なことです。

●我慢しないで表現する

以前、ソーシャルワーカーから、「人は我慢でき

るけど、我慢は良い形で外に出さないと、ドロドロした嫌なものに変わってしまう。そうならないように表現しないといけない」と教わりました。だから、私はこれまでも保育の中で、情報を共有するとか話をするということを心がけてきました。そのあたりが、今回震災で緊急事態にぶつかったときに実践できて、そして結果的にそれが良かったんだと思っています。

● 職員の成長が楽しみ

私は、職員のしんどさや気持ちの変化に、絶対気づこうと心がけています。お母さんたちの変化は、子どもに影響し、子どもが表現するのでわかりやすいのですが、職員の変化はなかなかわかりにくいのです。変化に気づけるよう心がけ、気になるときはすぐに話をしたり、まわりの先生に様子を聞いたりします。

自分の言ったことが受け入れてもらえる、相談できる、そしてどういう方向に進んでいくべきかの改善策を共有できるという職員関係は大事だと思っています。私にとっては、子どもたちの成長だけでなく、職員、大人の成長もとても楽しみなんです。

取材を通して

おかもと めぐみ
*岡本 恵（なかよしすみれ保育園 保育士）



行く前は「取材」が初めてだったこともあり緊張し、被災地の人にとこまで話を聞いていいのかという不安でいっぱいでしたが、実際に現地に行き取材する中で、ただ被災地を見るだけでなく、実際に被災した人たちの貴重な体験を聞くことができました。保育士をしているだけではできなかった貴重な経験ができ、今回取材に行けて本当に良かったと思いました。

また、これをただ聞いただけで終わるのではなく、しっかりまわりに発信し、共有し、今の自分たちに何ができるのか、自分たちがこの経験をもとに何を見直し、何を備えないといけないのかを、考えていかなければならないと思いました。

ばば ゆう
*馬場 優（東桃谷幼児の園 保育士）

一番に感じたことは、生きる力がみなぎっている人ばかりだったということです。目の前にいる高齢者や子ども



もが自分を必要としてくれていることが、働く原動力になっているのだらうと感じました。もちろん、いろいろな人に話を聞く中では、まだまだしんどさを感じ

抱え、自分の進むべき道を模索している人もおられましたが、何もかもがなくなってしまう時に、自分を必要としてくれている人の存在や人と人との結びつきは、心の復興というところでは欠かせないものだと思います。

また、保育士としての自分と被災者としての自分。こんな状況で保育士を続けられるのか、私だったらどちらを取るかと、取材に行く前から考えていました。しかし、保護者にも「私も大変だったよ」という話し方をし、職員と利用者という立場を越えて、手を取り合って前に進んでいるという話を聞き、保育士としての自分と一個人としての自分を分けて考えること自体が間違っているのではないと思いました。仕事も、働き生きる原動力になっ

ていくんだと感じました。話を聞いて、人とつながりあえる保育士の仕事ってやっぱりとても素敵だと改めて感じました。私も保育士として誇りを持って働いていこうと、改めて自分の保育

士という仕事を考えさせられました。

まつばらちえこ
*松原千慧子（すみれ乳児院 保育士）

震災から一年半、テレビなどでは復興に向けた番組が目立ちますが、海のそばの街は根こそぎ奪われたまま、住み慣れた街から離れる人も少なくありません。

そんな中、今回取材させていただいた方々は、被災者でありながら支援する側にあり、必死に今まで生きてこられました。利用者さんのしんどい気持ちを受け止めながらも支援を続けられたのは、同じ境遇にある人と経験を分かち合い、地域や利用者さん、同僚との関係が日頃からしつかり築かれていたからだと感じました。職場自体も、職員のしんどい気持ちをためこみすぎない環境づくりをされていて、多くの働く場がそうであれば良いの

にと思いました。

南海大震災も遠くない未来に起こると言われ、被災者という立場は明日の私たちかもしれません。日頃から家

族や同僚と、地震や水害に見舞われた場合の話し合いをしなければいけないと強く感じました。



「鳥、いなくね？」——取材を終えて、今年四月に昼の時間帯だけ立ち入りが許可された小高^{おたか}に車で向かった。立入区域限界近くでメンバーが呟いたこの一言が、全員の不安を一気に呼び起こした。「僕らは、ここにいて大丈夫なのだろうか？」。

JR福島駅でも、避難指示区域からたった二キロしか離れていない取材先を訪れた時も、マスクを

している人はなく、とりたてて警戒している様子もない「普通さ」があった。どれほどの不安を乗り越えて、その「普通さ」を作り出しているかは、取材を終え小高を訪れた時、初めて実感できたように思う。私たちは、利用者だけでなく、福島の特異な不安さを乗り越え、日々実践に取り組む職員から多くのことを学ばされた。

(福島取材班)

へが好き! 不安に打ち勝つ私の原点

NPO 法人あさがお (福島県南相馬市・精神障害者支援施設)

支援員

理事長

さとう まゆみ
佐藤真由美さん (29歳)

西 みよ子さん

◎佐藤真由美さんのお話

Q. 放射能への不安はありますか？

「毎日悩んでいます」

震災・原発事故から一年半たった今でも不安は消えません。私にも子どもがいるし、もし子どもに放射能の影響があったら、それは避難しなかった私たち親の責任だし、本当はここを離れたほうがいいのではと毎日思っています。

放射能の問題は全然解決してないし、どの情報が正しいのかもわかりません。子どもを連れて海



水浴にも公園にも行けず、水道水を飲まないようにしたり、地元の食べ物も避けています。

あさがおでは他県から豆を仕入れ、豆腐をつくって販売しています。放射線の基準値もクリアしていますが、「福島」「南相馬」という名前があるために売れません。「どうして？」と思うけど、自分に置き換えて考えると、こわいと思うのは仕方ないのかもしれない。

避難したほうが良いと思うけど、でもあさがおを辞めたらきつと後悔します。葛藤の毎日です。

Q. それでもあさがおに戻ってますのはなぜですか？

「人が好きだから」

やっぱり福祉の仕事が好きで、あさがおが好きで、利用者さんも大切だからです。高齢者介護の仕

事をしていたときも含めて九年間、福祉の仕事をしています。人と関わる福祉の仕事が本当に楽しいんです。

西理事長の人柄もあります。利用者さんのことは理事長が一番考えていて、栄養ドリンク剤を飲みながらなんでも率先してやりまします。そんな理事長を見てみると、「自分たちも頑張らない」と思っています。よく怒られますが、その理由もはっきり伝えてくれるので、怒られた経緯を考えるようになり、単に反省するだけでなく、自分自身の実践を振り返る機会も増えました。お母さんみたいな、太陽みたいな存在で、本当に尊敬しています。

「仕事を楽しむ」

仕事をしているときは、放射能の不安を忘れて利用者さんに集中

できます。ここに来ているのが楽しくて、仕事がりフレッシユになっっています。楽しくないと仕事は続かないですよね。みんなが楽しく過ごせるように、まず自分が仕事を楽しくむことを心がけています。

震災後、小さい地震でも敏感になり、不安になることもあるけど、おどけて笑い飛ばします（笑）。こんな状況でみんなが同じ悩みを抱えているからこそ、職員も利用者さんもお互いを思いやり、気遣ったりでき、一緒にここまで頑張ってこられたんだと思います。



左が西理事長

◎理事長の西みよきさんにも

お話を伺いました。

☆南相馬であさがおを続ける理由

あさがおは昨年の四月一日に再開しました。一度に四人の家族を失った利用者さんがいて、悲しみで何もする気が起きない中で、あさがおに来てみんなと話すことが救いになった、と言っておられました。それを聞いて私は、南相馬

で続けていくしかないと思いました。こんな福島でも、あさがおでも、この場所を必要としてくれる人がいると知り、再開を決めたのです。

☆若い人を閉じこめていないだろ

うか

職員にも家族や子どもがいて、何も解決していない不安の中で、こうして明るく働いてくれて本当

に感謝しています。

今もJR常磐線は電車が通れないままで、南相馬は陸の孤島のようになっています。情報も全然入ってきません。放射能のこともあるし、限りなく未来のある若い職員のためにも新天地で新たに始めたほうが良いのでは、とも考えました。

でも私たちの主役は利用者さんで、利用者さんをどう支えるかが一番大事です。震災後二週間、みんな山形へ避難しましたが、その間にしんどくなった利用者さんのことを考えると、移転はできませんでした。

☆これからを担うのは若い人

震災後たいへんな状況が続く、職員も精神的にしんどくなったりする中で、私自身このままではだめだと思って、今、資格を取ろう



NPO法人あさがお

あさがおは、就労継続支援事業B型、グループホーム事業、ケアホーム事業を行っています。

福島第一原発から32キロ地点にあるため避難対象区域外となり、南相馬市が出す避難バスに乗れませんでした。みんなで相談し、利用者さんと職員26人で6台の車に分かれて、山形県上山市の公民館まで避難しました。

2週間、いろんな人に支えられながら避難生活を続けましたが、時間が経つにつれ体調を崩したり精神的に不安定になる利用者さんが増え、3月31日、南相馬に戻ってきました。その後は震災で行き場所がなくなった方や仮設住宅では生活できない方も受け入れながら、南相馬で運営を続けています。

取材を受けてくれた佐藤さんは、震災後に赤ちゃんが生まれ、昨年6月まで県外に避難していました。その後、あさがおに帰ってきました。



と東京まで通って勉強しています。私が外に出て、施設のことにはあまり口を出さないことで、若い職員に施設内の責任を担ってもらう意味もあります。

もちろん、これからを担うのは若い人たちですから、仕事をしながら福祉の勉強ができる環境を整えたいと思っています。ほかの地域から先生を呼んだり、勉強会に行ってもらったり、あさがおの中でいろんな場面を想定して対応の仕方を研修したり……。

資格がすべてではないけど、未来ある若い職員がそれぞれの専門性を高められるように、できる限りサポートをしたいと思っています。

☆必要とされていると感じられることが大切

人がいきいきするのは、やりた

いことがやれて、それが必要とされ、評価されたときですよね。ここにいる人たちは、利用者さんも職員もみんなそれぞれ必要とされています。そのことをみんなよくわかっています。「自分がここにいることが必要とされている」と感じられることが一番大事です。

私が気をつけているのは怒り方です。私はよく怒るほうですけど、怒るときは必ず理由を話します。相手の気持ちも十分にくみ取り、一緒に良い解決方法を見いだせるように心がけています。

これまで頑張ってくれた若い職員に少しでも家族と一緒に休んでもらおうと、一週間の八丈島での休暇をプレゼントしました。ゆっくり休んでほしいと思います。その間、私たちは大変ですけど(笑)。

あさがおのスタッフと福島取材班。前列左から3人目が佐藤さん。撮影したのは取材メンバーの嘉幡です。



取材を通して

*** 出雲達朗**（南海香里のさと 支援員）

福島市内は被災地という雰囲気があったく感じられないのに、一歩市内から離れると非日常の光景が広がっていて、とても不思議な感覚でした。でも、そこに暮らす人たちは「普通の日常」をめざそうとその過酷な環境の中で不安や葛藤に押しつぶされそうになりながらも、めげずに前を向いていました。

まだはつきりと言葉にすることができませんが、福島取材から戻ってから何か自分の中で考え方が変わったと思います。いくら過酷な状況に置かれていても自分から前向きに進んでいこうとする気持ち。また、人は同じ



職場の職員や利用者、まわりの人たちに支えられるこ

とによっていきいきと働くことができるのだなと思いました。

これから私も先輩になっていきます。福島で働いている職員の方と同じように支え合い、一緒によりよい仕事をしていきたいです。

*** 秋山昌平**（高槻温心寮 支援員）



「求められてるんだなって思う」。取材中、それらの

言葉は同じ福祉の現場で働く自分たちに、妙な共感を与えました。被災地では、放射能という大きな不安に覆われながらも利用者さんへの支援を続けています。そのこと自体、まづ素晴らしいことだと感じました。しかしそのことにストレスも感じており、複雑な心境がうかがえ、明るく振る舞ったり素直に不安を表したり、さまざまな若い職員がいました。

「（こ）（職場）が好き」と佐藤さんは言います。「やりたいことをしているときが、いきいきするでしょ」と西さんは言います。取材先は上司や先輩もいきいきといて、そのような環境だと若い職員も頑張れるのかもしれない。みんながいきいきと働けるような環境づくりを、自分も日頃から心がけたいです。

*** 畑陽大**（三島の郷 支援員）

この取材を通して、自分の目で見て、現地の方と関わってみてわかった福島の実状がいろいろありました。目の前にある今、そして未来。目を背けたくなるこの現実になささんが悩み、今日も苦しんでいます。大飯原発の問題もある中、もっとクローズアップし、県外の人々に知ってもらわないと、今問題になっっている教訓を次に生かせないと感じ



ました。

「不安もあるけど、やっぱり人と関わるのが好きだからこの仕事を続けられている」。佐藤さんのこの言葉は、福祉で働く人間の心に響くものがあると思います。たくさんある仕事の中で、人と関わるのが好きで選んだ福祉の仕事。自分が働いているエネルギーって何なのかなあと考える時間を持ち、素直に出たその答えをエネルギーに、日々の仕事を頑張ってもらいたいです。



＊嘉幡泰匡かばたやすま（すみれ共同作業所 支援員）

正直、震災
については新
聞やニュース
で見るぐらい
で、あまり関

心を持つてはいませんでした。

でも、実際に福島で生活を営む人
たちのお話、地震や津波で倒壊した
建物、放射能の影響で何も植えられ
ていない広大な田畑、人気のない町

並み、目にしたもの、どれも言葉で失うものばかりでした。どこか自分の中でこの問題を風化させてしまっているところがあつたけど、これは自分たちが住むこの日本で起きていることであり、終わらせてはいけないと思いました。これは実際に見なければわからなかったことだと思うし、自分が見て、聞いたことをたくさんの人に伝えていかなければならないと感じました。

今回、自分の目で見たから気づいたこと、感じられたことがたくさんあります。やってみて学んだことがたくさんあります。「チャレンジすること」を忘れず、これからの仕事に生かしていきたいと思います。

＊中嶋 聡なかしま あさひ（地域労組おおさか青年部）

「人が好きだから」。不慣れな取材ながらさらに質問を重ねるが、佐藤さんから出てきた答えはそれ以上ではなかった。取材を終えてずっとひっかかっている。「人が好きだけ



で頑張れるなら、福祉現場で働く人はみんないきいきできているはずだ。他に何か要因があるはずだ」と。考え続けた結果、それ以上の答えなどないんだと今、あらためて思っている。おそらく佐藤さんにはそのシンプルな動機に集中できる職場環境が整っているということなんだろうと思った。

つまり、人がいきいき働くというのは、それほど困難なことではなく、シンプルで根源的な動機に集中できるだけの職場の条件が整っていることなんだろうと思えた。逆説的だが、それゆえに職場環境がどれほど人のモチベーションを左右してしまうか、考えさせられる取材になった。

「生活のため」だけじゃない、働く原点をみんなが追求できる職場をつくる実践を、広げていきたいと思う。

座談会

若者がめざす明日

——一人ひとりが自分を発揮できる環境を——

ゲスト

- ・平田雄紀さん (29歳) ひらたゆうき (ハッピーコンピューター代表、地域労組おおさか青年部執行委員)
- ・川口加奈さん (21歳) かわぐちかな (NPO法人「Homedor」理事長・大阪市立大学四回生)
- ・佐々木唯さん (27歳) ささきゆい (ボランティア団体「East Japan RE: project」代表・編集メンバー)

& 編集メンバーたち

☆平田雄紀さん

高校を中退して定時制で単位を取りながら一七歳からエンジニアとして働き始め、これまで四〇五社の企業を渡り歩きました。昨年、働いていた企業が買収された際に派閥争いに巻き込まれ、不当にも懲戒処分が出されました。地域労組おおさか青年部(以下、青年部)に相談し、生まれて初めて団体交渉をすることになりました。現在は個人事業を立ち上げ、システムエンジニア兼コンサルタントのような仕事をしています。

まさか自分の身に降りかかるとは思っていないかつ

た労働問題や労働組合との出会いが、人生の転機、考え方の転機になりました。それまでもずっと日本の企業の働き方や経営の仕方には違和感を持っていましたが、青年部に入ってそれをはっきり感じました。日本の企業は、仕組みとしていきいき働ける、個人の能力を最大化できるものになっていないのだと思います。

どんな仕組みであれば個人の能力を最大化できるのか、どうしたらそういう環境をつくれるのか、ひいては会社という組織だけではなく社会をどうしていくのかということに関心を持っています。



佐々木さん

川口さん

平田さん

☆川口加奈さん

「ホームレスになるのは自業自得やから、関わったらアカン」と言う親への反骨精神から、一四歳で釜ヶ崎で炊き出しなどのホームレス支援に関わりはじめました。自分がこのホームレス問題を知ったからには何かできることがあるのではないかと、まずは中学校の先生にお願いし、全校集会でホームレス問題について講演。ワークショップも始めました。

しかし、どれだけ炊き出しや講演をしても、凍死するおっちゃんたちが減らない現実には、そもそもホームレスにならないように入口を封じ、そしてホームレスから抜け出せる出口づくりをしたいと思い、大学二回生のときにNPO法人「Homedoor」^{ホームドア}を立ち上げました。

主な事業は「HUBchari」^{ハブチャリ}。こっで借りてあつちで返すという乗り捨て型のシェアサイクル(自転車の共同使用)で、その運営を元ホームレスで現在生活保護を受給しているおっちゃんたちがしています。「HUBchari」によって半就労・半福祉のよう



な生活に、ひいては自立できるようにと、出口づくりをしています。将来的にはホームレスになるのを防ぐ入口での取り組みとして、セーフティネットワークの相談施設づくりをしたいと考えています。

☆佐々木唯さん

東日本大震災後、ボランティア団体「East Japan RE: project」^{イーストジャパンプロジェクト}を立ち上げ、チャリティーダンスイベントを開催。これまで一五〇万円を超える募金を被災地に届け、被災地でのダンス公演も行っています。

中学生で初めて海外に行った際に、テレビの情報と実際に現地で見ると現実が違ふと実感。アメリカの同時多発テロをテレビで見た時にどうしようもない違和感を感じ、自分の目で確かめるために単身渡米しました。そこで見たのは、戦争を煽るメディアとは正反対の、「戦争なんか意味ないねん!」と叫ぶ若者の姿でした。

疑問に思うことがあれば、とりあえず行って、自分の目で確かめ、自分の頭で考えることを心がけています。日本語教師になる夢をかなえるべく、昼間

は美容院で働きながら夜は専門学校に通い、声がかかればさまざまなイベントに顔を出し、とにかくいろんな人とながりたいと飛び回っています！

チャレンジできる、失敗が許される社会に

平田 日本の社会は、リスクを過大評価する文化があると思います。失敗が許されない社会。教育の段階で成功体験を積んだり、ある程度のリスクがあってもチャレンジしていくという経験ができていないのではないのでしょうか。

チャレンジできるためには、失敗したときに許される文化が必要です。アメリカのIT社会では、ベンチャーキャピタルという投資ファンドがあつて、アイデアが良ければそれを評価して投資してくれます。失敗してもまた挑戦できる環境があるのです。アメリカの名だたるIT企業の八割はベンチャー企業なんです。逆に日本はNTTなど昔ながらの大きな会社ばかりですよ。それだけ、なかなかチャレンジが許容される社会ではないのだと思います。

川口 私もチャレンジできる社会が必要だと思います。ホーム



レスを生み出す日本の構造を変えたい、ホームレスにならない社会にしたいと活動をしています。世代間の「貧困の連鎖」問題や雇用の不安定化など、ホームレス問題はさまざまな要因を内包していると思います。ホームレスになる要因を断ち切ることが、日本の社会に一番必要だと感じています。絶対にホームレスにならない日本だったら、いろんなことに挑戦しやすくなりますよね。将来的には、そうやって考えられる社会にしたいです。

平田 最近のホームレスへの偏見や生活保護バッシングも、リスクの過大評価が影響していると思います。今の日本の社会の中でホームレス状態になるとか、生活保護をもらわないと生活が立ち行かなくなる可能性があると認めることは、自分がそうなる可能性を認めることになります。みんな転落するのが怖いので、拒絶反応としてバッシングするんだと思います。

でも、そこにちゃんとセーフティネットがあれば、「失敗してもいいじゃない」と言える。失敗したら死ねと言われるような状況が目の前にあるのは、やっぱりおかしいです。

上垣 失敗を許してくれる人がいるというのは大切ですよ。

僕は保育園の栄養士ですが、先



上垣

日、子どもの誕生日会で出すゼリーづくりを失敗してしまったんです。そのとき園長先生が、「子どもたちに置き換えて考えると、失敗が許されることを知らない子どもは『大人の期待に応えなければ』と思うあまり、足が出なくなる。大人でも失敗することがあるし、許されてやり直せる。私たちはそういうことをしっかり子どもたちに伝えることが大切じゃないですか」と話してくれました。

その言葉に僕自身もとても救われたし、そこで**フォローしてくれる人**がいるから、また新しいことにチャレンジできると思いました。失敗してもいいという経験が、子どもたちだけでなく僕ら大人にも必要だし、そういう経験を子どもの頃から積み重ね

ていくことで、みんなが認め合える社会になるのではないかと思っています。

思いやり、歩み寄り、信頼

佐々木 私の働く美容院は「デイズニールランド」がコンセプトで、みんな本当にいきいき楽しく働いています。ポイントは、「絶対否定的なことは言わない」、「何でも言い合える関係」です。

「ありがとうカード」という制度があり、どんな小さなことでも「うしてくれてありがとう」という小さなカードを机の上に置いてくれます。私の活動も応援してくれて、何十歳も年の離れた先輩にも「それは違うと思う」とはつきり言えるし、「気づかせてくれてありがとう」と言ってくれます。そういう関係や環境が**会社に浸透している**んです。

川口 私の組織では、毎月二五日に褒める点を列挙した「**ほめほむメール**」を送り合っています。また月一回、組織内運営向上委員会を開いてミーティングをしています。それにプラスして、飲みニケー

シヨン」ですね。

馬場 私の保育園でも、良かったことや、私やったらこうするよという、直接はなかなか言いにくいことを紙に書いて、研修の時に共有しています。良いことは言いやすいので、少しずつ直接言えるようになります、職場の雰囲気が変わってきました。



馬場

宮城に取材に行つて、職員がいきいき働いている職場では、園長先生と現場の保育士と一緒に考え、同じ方向に進んでいるなど、とても感じました。子どもとの関係だけでなく、職員同士もお互いが歩み寄ったり、相手を批判する前にまず自分を振り返ることがとても大事なんだと思います。

平田 企業も同じです。私は一七歳から「どれだけのパフォーマンスを発揮できるか」という企業社会の中で生きてきましたが、会社の中で支え合っているというバックグラウンドがないと、どんどん居場所がなくなつて、どんどんギスギスして、どんどん「いきいき」が消えていきます。組織の中で支え合う、認め合うというのは、とても大切だと思います。

最大限を発揮できる職場

佐々木 ちゃんと自分の頭で考えたら、テレビで報道されていることがどれだけ嘘か、わかります。でも、日本はそれを押し殺し、なるべくミドル（中間）にいろことを良しとする社会なので、その流れに流されるのか、叩かれるのをわかつていて頑張るのか、ということですね。入ってくる情報を鵜呑みにせず、正確な情報をつかんで自分の頭で考えることが大切だと思います。

昨日サウジアラビア人の友だちと高野山こうやさんに行き、滋賀のいじめの問題を話していました。すると急にその友だちが私を指さして、「君のせいだよ。君の社会なんだから、君が行動しないからこうなったんだよ」と言っただけです。びっくりしたけど、でもその通りだと思いました。指さして「君のせいや」と言ってくれる人が近くにいて、私は幸せです。それぞれが自分の頭でしっかり考え、他人事ひとごとではなく、「私がないと誰がするねん」という自覚を持てば多く

の問題は解決できると、高野山で悟りました(笑)。
川口 私も「自分がやらないと誰かが死んでしまう。自殺してしまう。生活保護を受給しないといけないくなってしまふ」という状況が後ろに迫っていると思っているの、それが私の活動の原動力になっていると思います。

私は「流されるままに」というのが信条です。自分のやりたいことをして流れ着いた先が、自分が必要とされている場所だと思ふし、そこが居心地が良くて、**自分の能力を最大限発揮できる場所**なのではないかと思っています。

平田 これまで働いてきて、いきいきと働いている人に出会うことがなかなかありませんでした。青年部と関わるようになって、その理由がわかった気がします。

基本的には、その会社の組織自体が、入ってきた人が**元気がなくなる仕組み**になっているのではないかとことです。原因は、日本の企業では「働く」ということに対する共通の価値観がないからだと思っています。何のために働くのか、何のために事業をし

ていくのか、ビジョンは？ ということがはっきりしていない企業が多いと思います。

私が独立してコンサルタントのような仕事をしているのは、ひとつの実験です。どうすれば社員が働きやすく、共通のビジョンを持っていきいきと働けるのか。その方法を模索しながら、小さな成功事例を増やしていきたいと、今は思っています。

稲田 ゲストの三人のように自分の「やりたいことをする」というのは、意外にハードルが高いことです。福祉の仕事は、本当にやりたいとか、好きという気持ちがないとできない仕事だと思ひますが、保育士さんの話を聞いていると、**保育がしたいのに事務仕事が多くて、やりたいことができないというジレンマ**を感じているようです。好きなのに続けられないというのは、一番つらいですよ。



稲田

そういう人が好きなことを続けられるようにするにはどうすればいいのかと、いつも考えています。リスクを過大評価しすぎるといふ話がありました。が、もちろん最初からダメ元と思うのではなく成功

しようと思つて挑戦しないと、仮に失敗してもそこからは何も学べないけど、そういう「やりたいことをする」というハードルを下げたいですね。

一人ひとりが自分を表現できる社会

佐々木 私は「イッア スモール ワールド プロジェクト its a small world project」という、人と人をつなげるプロジェクトもしています。いろんな国や世界、分野の人と出会い、つながって、友だちになることでいろんなことが他人事ひとごとではなくなるんじゃないか。そうなれば戦争なんて起きないと思っています。だって、世界に親友がいたら、親友のいる国に爆弾なんて落とさないでしょう。だから私も世界中のいろんな人とながりたいし、みんなをつなげたいと思っています。

上垣 そのプロジェクトいいですね！正直言つて、今日のゲストの三人を新聞とかで見ただけだったら、「変わってるなあ、すごいなあ」で終わってしまうと思います。でも今日みたいに実際に会うことで親近感も湧くし、少しでも協力できたらと思え

ます。こういうつながりそのものを、僕たち自身が意識して広げていきたいと思いました。

嘉幡 福島への取材が決まったとき、正直、行く前はちよつと消極的でした。熱意のない若者です(笑)。でも実際に行つて、自分の目で見て、話を聞いて職場で報告すると、いつの間にかとても熱く語っている自分がいました。ゲストの三人が言う「自分がやらな！」みたいな熱さは、僕が福島に行つて感じたことなのかなと思いました。

実際に自分が行つて、考えて、動いて、学んだことだからみんなが聞いてくれるし、変わった自分がいいます。チャレンジが大事だと感じたのと同時に、そのためにはたとえ失敗しても許される環境が必要なんだと思いました。そこで職場の環境がポイントになると思いますが、そういう環境を、一緒に働くみんなでつくつていかなければいけない。これからの社会を担うのは自分たちだし、一人ひとりがあしたい、こうしたいと表現できる

ような社会にしていきたいです。申 ありがとうございます。



嘉幡